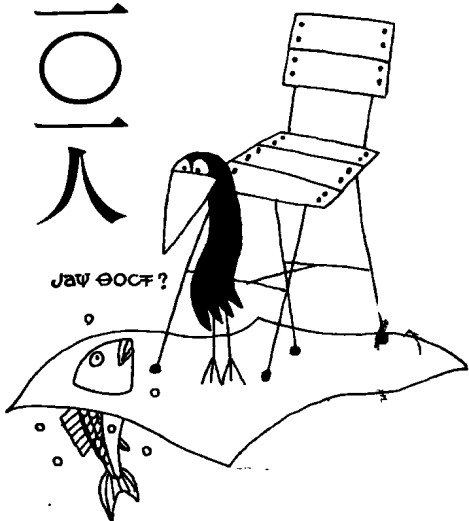


現代の作家二〇人

百目鬼恭三郎



現代の作家二人



百目鬼恭三郎

げんだい さつ か にん
現代の作家101人

著者／百目鬼恭三郎（どうめききょうざぶろう）

●
印刷／昭和50年10月15日

発行／昭和50年10月20日

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

郵便番号162／東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808

電話・業務部03(266)5111・編集部03(266)5411

●
印刷所／凸版印刷株式会社

製本所／大口製本株式会社

●
定価／900円

© Asahi Shinbun Printed in Japan, 1975

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

現代の作家一〇一人*目次

現代の作家一〇一人

阿川弘之	16	阿部昭	18	安部公房	20	鮎川哲也	22	飯田龍太	24
生島治郎	27	池波正太郎	29	石川達三	31	五木寛之	33	伊藤桂一	35
井上ひさし	37	井上光晴	39	井上靖	41	井伏鱒二	43	宇野千代	45
円地文子	47	遠藤周作	49	大江健三郎	51	大岡昇平	53	大庭みな子	55
大原富枝	57	小川国夫	59	小沼丹	61	開高健	63	加賀乙彦	65
梶山季之	67	川上宗薫	69	北杜夫	71	金石範	73	倉橋由美子	75
黒岩重吾	77	源氏鶏太	79	河野多恵子	81	小島信夫	83	小松左京	85
五味康祐	87	早乙女貢	89	笹沢左保	91	佐多稲子	93	佐藤愛子	95
佐野洋	97	芝木好子	99	柴田翔	101	柴田錬三郎	103	島尾敏雄	105

和 田 芳 恵	217	結 城 昌 治	207	三 好 徹	197	丸 山 健 二	187	古 井 由 吉	177	藤 枝 静 男	167	野 坂 昭 如	157	中 里 恒 子	147	戸 川 幸 夫	137	田 辺 聖 子	127	曾 野 綾 子	117	庄 司 薫	107
		結 城 信 一	209	村 上 元 三	199	三 浦 綾 子	189	古 山 高 麗 雄	179	藤 本 義 一	169	長 谷 川 四 郎	159	中 村 真 一 郎	149	富 岡 多 恵 子	139	陳 舜 臣	129	高 井 有 一	119	庄 野 潤 三	109
		吉 村 昭	211	安 岡 章 太 郎	201	三 浦 朱 門	191	星 新 一	181	藤 原 審 爾	171	花 田 清 輝	161	南 条 範 夫	151	豊 田 穰	141	塚 本 邦 雄	131	瀧 井 孝 作	121	城 山 三 郎	111
		吉 行 淳 之 介	213	山 口 瞳	203	三 浦 哲 郎	193	前 登 志 夫	183	舟 橋 聖 一	173	深 沢 七 郎	163	仁 木 悦 子	153	永 井 龍 男	143	辻 邦 生	133	武 田 泰 淳	123	杉 本 苑 子	113
		渡 辺 淳 一	215	山 田 風 太 郎	205	水 上 勉	195	丸 谷 才 一	185	船 山 馨	175	福 永 武 彦	165	新 田 次 郎	155	永 井 路 子	145	筒 井 康 隆	135	立 原 正 秋	125	瀬 戸 内 晴 美	115

装幀／佐々木侃司

現代の作家一〇一人

この本の宣伝のための架空講演

ええ、今日お話し申しあげるのは「現代の作家一〇一人」という私の本についてであります。最初にお断りしておくと、この本は、昭和四十八年二月から五十年三月にかけて、朝日新聞文化面に連載した「作家 Who's Who」を改題したもので、訳すと「作家紳士録」という題名の示す通り、現代作家の作風、作品の紹介であることは確かなのですが、ただ、普通のこの種の本とはちょっと性質の違ったところがある。少なくともそのつもりで書いたのであります。

では、どういうところが違うかと申しますと、対象にした読者が違う。普通この種の本は、現代文学を読みたがっている人のために書かれているのですね。ご存知の通り、日本では、現代文学の読者というと、まず同業者（笑声）これは作家とか批評家、編集者のことなのですが、それに、学生と独身の女性にほとんど限られているようであります。まさか入門書を同業者のために書くはずはないから（笑声）、著者はおそらく、若くてちょっと美人で、しかもそんなには頭がよさそうでない（笑声）女性を頭に浮かべて書いているに違いない。ところが、この「作家 Who's Who」は、現代文学とは無縁の人たちを対象にしているのであります。そういう読者というと、これはもう中年の男性が圧倒的に多い。私のおります新聞社でも、部長くらいになるとほとんど読んでいない（笑声）らしいのですね。私は、その人たちの顔を見ながら毎週「作家 Who's Who」を書

いたのであります。読ませようとする相手が手近に何人もいるのですから、どう書いたら彼らが面白がるか、反応をうかがううちに段々ツボがわかってくる。つまり、実験台には甚だ恵まれていたわけで（笑声）あります。

ところで、現代文学に関心のある読者と、無縁の読者とは、案内・入門書の性質を変えなければならぬのですが、この場合、無縁の読者は、現代文学に対して無知なのだから、普通より程度を下げないといけないと考えやすい。これは大きな間違いであります。なぜなら、この人たちの多くは、年功を積んだ中年の男性であるのですから、そんな幼稚な本を辛抱して読めるはずはないのであります。大人になってからの外国語の学習はむずかしいのですが、それは、大人の頭脳にとって、初心者向けのリーダーは内容が幼稚に過ぎて辛抱できず、途中で投げ出してしまふからなのです。あれとおなじで、彼らにとっては、若い読者向きの普通の文学入門書でさえ、中味が薄っぺらであり過ぎるのです。盛りだくさんに情報を提供しているようにみえて、実は、肝心のことは何も書いていない。そういう実質を見抜く力は、現代文学について何の知識をもたなくても、彼らは長い人生経験でちゃんと身につけているのであります。

それなら、もっと程度の高い作家論、作品批評を読んだらいいじゃないかといわれるかもしれませんが、これがまたヒドイ（笑声）。いまの専門家の批評は、この小説が面白いとかつまらないという鑑定でもないし、これがどんな作品であるという紹介でもない。他人の作品をダシにして自分を語るといのが、現代批評の主流なのだそうです。つまり、批評は、自分の文学観を展開してみせるのが目的であるわけですから、とりあげた作品の出来の良し悪しの判定などは二次的な問題に過ぎない。それなら「この作品は失敗作である」などといって作者を怒らせることもあるまい。そういう評価は適当にばかしておこうということになる。いまの時評や書評で、

作品に対する悪口が極度に少なくなったのは、こうした事情のせいと私は思うのであります。

しかしながら、作家・作品の直接的な評価は、批評におけるもっとも素朴で根元的な機能ではなかったでしょうか。たとえば、中世の歌論書である藤原清輔の「袋草紙」に、藤原定頼、例の百人一首の「朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれたる瀬々の網代木」の作者ですが、その定頼が父親の公任に「和泉式部と赤染衛門とはどちらがすぐれた歌人でしょうか」と問うた話が載っています。この問いに公任は「二人は同列には論じられない。なにしろ和泉式部は『津の国のこやとも人をいふべきにひまこそなけれ草の八重ぶき』という名歌を詠んだ歌人である」と答えたというのですね。現代だったら「武田泰淳と大岡昇平はどちらが上だろうか」とか「井伏鱒二と庄野潤三とはどちらが描写がうまいか」などと論じるようなものでしょうが、今日こんなふうに作家の優劣をまともに論じる批評家などいるはずもない。そんなことを聞こうものなら「だから素人は困る」と苦笑されるのがおちでしょう。

ついでに申しあげると、この公任という人は作家の優劣を論じることが好きだったらしく、紀貫之と柿本人麻呂の優劣について具平親王と論争して負けた話が、やはり「袋草紙」に載っています。今日からみれば、まったく素人の態度なのですけれど、事実は素人どころか、公任は当時の歌道の最高権威であったのですね。藤原長能が花山院の歌会で「心憂き年にもあるかな二十日余り九日といふに春の暮れぬる」と詠んだら、公任が「春は三十日しかないのかな」といった。長能はその批評を苦にして不食の病となり、ついに死んだ、という話からも公任の批評家としての権威のほどが察せられるであります。そういう、小林秀雄氏なんかよりずっとこわい存在であった（笑声）公任が、好んで作家の優劣を論じたというのは、当時は、批評のこの根元的な機

能をいかに重んじていたかを物語っていると思うのであります。

そして、公任の時代からおよそ百年たって、「金葉集」時代の歌人である藤原実行と藤原俊忠が、凡河内躬恒おほしこうのみつねと、紀貫之の優劣を論じた話が、鴨長明の歌論集「無名抄」に載っている。この論争は一向にけりがつかないので、白河院の御意向で源俊頼に決着をつけてもらうことになったのであります。ところが、俊頼はただ「躬恒を軽視なさいますな」とだけ答えた。貫之のほうが勝っているとする俊忠は意外に思って「では貫之が劣るのですか。はっきり決めて下さい」と押すと、また「躬恒を軽視なさってはいけません」といったので、俊忠の負けとなったという話なのです。

俊頼は「金葉集」の撰者で、当時随一の歌人でしたから、この時代もまだ作家の優劣を判じる批評が重んぜられていたことがわかるのであります。ただ、公任にくらべると、俊頼の批評のしかたは私には少し気に入らない（笑聲）。公任は優劣をはっきりさせているのに、俊頼のほうは、貫之が躬恒より劣るとははっきりいっていない。この辺りは、どうやら現代の批評家の口ぶりに似て慎重であるのですね。そうした尻尾をつかまれないようないかたには、自分はプロ批評家であるという意識がありありとみえて、少し嫌味なものであります。

俊頼は、そのような当たりの柔らかな批評のため、歌合わせの判者として人気があったようですけれど、たとえば、大原へ遊びにいった、良遍法師りょうへんの住居跡を通ったとき馬から下りて人々を感心させた話が「袋草紙」に載っているのですね。これは、能因が伊勢の御ごの家いえの跡を通りかかったとき車から下りたという故事の猿真似で、こうしたいかにもプロらしい計算されたポーズは、現代の文学者にも大分近くなってきた（笑聲）。まあ、俊頼のころになると、公任の時代より、批評のこの根元的な機能がやや後退してきた、といえるであらう。

それからずっと時代が下って、近代に入ってからまだこんな批評があります。「広告に拠ればこの作腕によりを掛けたりとあり。線を掛けたるものにねぢれざるは殆んどなければ、此腕も恐らくはねぢれたるなるべし。ねぢれたる腕なれば無論手がふるへて斯んな拙いことに立至りしなるべし」(笑声)これは偏外、露伴らの合評「雲中語」に載ったものですけれど、まことにすさまじい作品の品定めであるのですね。ここまでは、批評のこの機能は生きていたわけなのであります。

話が太分横にそれてしまいましたが、要するに、現代文学に無縁の読者がいちばん欲しているのは、批評のこの機能、つまり、この作品は面白いかつまらないか、すぐれた作品か拙劣な作品か、という評価なのであります。しかし、先にもちょっとお話し申しあげたように、専門家はそんな批評はしなくなっている。それなら、素人が書いてみるより仕方あるまい。そう考えて始めたのがこの「作家 Who's Who」なのであります。私は学芸記者ですから、仕事で現代文学を読まなかったわけじゃない。が、正直いって、これまで嫌々読んできただけで、面白いと思つたことはほとんどなかったのですね。ですから、本質的には、現代文学に無縁の人々と同類なのであります。その同類の一人として、読んだ作品が面白かつまらなかつたかを率直に述べ、頭の中で形をなした作家像を描いてみせれば、この人たちによくわかつてもらえるのではないか。そう思ったのであります。

その意図がどの程度まで成功したかは、この本を読んで判断していただくとして、できるだけ意図に忠実であるために、専門家の作品論、作家論はできるだけ読まないようにしました。予断をもたないようにしたわけですが、仮に読んだところでそう影響は受けなかつたかもしれません。

なぜなら、私には、専門家の作品論、作家論は、何をいおうとしているのか読んでもよくわからないからです(笑声)。もっとも、あまり独断に陥っても困るので、何人かの友人の専門家の意見は聞いていますから、そうめっちゃめっちゃ暴走はないつもりであります。

とはいっても、ここに描いた作家像が、まるで好んで異をたてているかのように、普通のはかなり違ったものになっている場合があることは認めなければなりませんまいし、また、作家に対する評価も、世評とはちょっと食い違っている場合もあるのですね。その違いがどんなものかは、この本を読んでいただければわかることなので、ここでは具体例をあげませんが、ただ、私と文壇の評価が食い違っているからといって、私のほうが間違っているとは思いたくないのであります(拍手)。あまり大きな声ではいえませんが、こんどの仕事を通じて痛感したのは、文壇の作家に対する評価も、結局、会社の人事と似たところがある(笑声)ということなのです。実際、文化勲章だの、芸術院会員だの、もろもろの文学賞の恩恵に浴している作家と、不遇な作家の作品を読みくらべて、義憤を抑えかね、ついこちらの筆も反対の意味で不公平になってしまったことを、告白しておかなければなりませんまい。この本で、功成り名遂げた作家には不当に辛く、不遇な作家に対しては不当に甘い、という傾向がみえるのは、このような感情の抑制に失敗した結果なのであります。

なお、ついでに付け加えておきますと、「おまえは通俗小説に甘く、純文学に辛いのではないか」という批評もよく聞きました。たしかにその傾向があったことは否定しません。これまで熱心な文学読者でなかった私は、純文学と大衆文学の差はそれほどなからう位に考えていたのであります。ところが、よく読んでみると、その差が予想以上に大きいことを知って驚いたのです。通俗小説を純文学作品と同列にならべたのでは、悪口を書くほかはなくなる(笑声)。で、通俗小

説のほうは、できるだけその取得を推奨することに重点をおくことにしたのであります。にもかかわらず「けしからんことを書いた」と腹を立てて騒いだのは、甘くしたはずの通俗小説作家ばかりだった（笑声）。

思うに、辛い点をつけられた純文学作家のほうは、もっと腹を立てているかもしれないのですけれど、彼らはさすがに批評に慣れているから、「素人が何を見当違いのことをいつてるか」などと黙殺するだけの余裕があるのでしょう。ところが、通俗小説作家のほうは、日ごろ雑誌の編集者からほめられてばかりいて、まともに批評されたことがない。だから、ちょっとでも自分の欠点を指摘されると、カッと頭に血がのぼるらしいのですね。ことに女流はそうらしい（笑声）。もっとも、悪口をいわれて腹を立てるのは、人間性が健全な証拠である。実をいうと、私はそれまで、この人たちがあんな小説を平気で書いていられるのはどういう神経なのか、よくわからなかったのですね（笑声・拍手）。それがこれでよくわかって安心したような次第であります。

最後に一言。現代日本文学をあれだけ集中的に読んだのだから、おまえも少しは好きになつたろうと、友人たちにいわれるのですが、結局、私の現代日本文学嫌いは直らないままであったのですね。心底から面白いと思える作品が少な過ぎて、全体として徒労に終わったような気がしてならない。内向の世代の小説を我慢して読むよりは「感情教育」を読んだほうがずっと広やかな気分になるし、いま本屋の店頭にあふれている通俗小説の人気作家の作品集よりは、たとえば、C・S・フォレスターのホーンプロワ物のほうがずっと面白いと思う気持は変わらなかったのです。あります。この本で、面白いと持ちあげた作品の数はかなりありますけれど、そこはそれ、作者に対する儀礼も多少ふくまれていますから、そのつもりで割引いて読んでいただきたいのです。ご静聴を感謝いたします（拍手）。